

白い藻

濱田湧壮

地元の母から送られてきた段ボールには
藻が詰まっていた

白くて生温かい藻

僕はその藻をまとって会社に行く

友達と飲みに行く

人に電話をかける

藻は細い腕の形をして

僕のからだに巻き付いている

散歩しながらスマホ片手に話をする

水族館に行きたいねという話

何が見たい？

そのあと何食べたい？

僕は電話口のその人に

差し出したいものがある

差し出されたいものもある

藻のつくる手のひらが僕の口を覆う

もう片方の手が足首を掴む

僕は何も言わず電話を切って帰途につく

父の単身赴任が決まったとき

母はなぜ泣いていたのか

散々赤黒い痣をつくったのに

写真だって残してあるのに

母と手をつないで警察署の鏡張りの建物の前に立ったとき

僕ははじめて自分の輪郭や色を知ったのに

母は父のために嗚咽を漏らした

どんなにぶつてもその色に染まるわけではない？

僕は裏切られたと思っている

水族館に行きたい

アオリイカが見たい

という僕の腕を白い藻がつかむ

行っってはだめ

どうして

その行為は白くはないから

白って何

何も与えないこと

何も受け取らないこと

少なくともそう努めること

それでもアオリイカが見たい

ガラスの向こう側に行こうとして

尖った口元を何度も折るアオリイカ

折れては退き また進む

藻はそれを見る僕の腰にまとわりつく

僕は藻の手の甲にふれる

白でなく赤ならどうですか

あなたがそうだったように

藻はぎゅっと拳を握る